



佐世保 ライフ 2 ー せいかつ



烏帽子岳方面から昇る朝日

自分が住んでいた官舎のマンションは、港に近い古い港町の雰囲気を残している街にあり、仕事の中心となる佐世保駅周辺再開発事業地区にも近接していた。

ワンフロアに4戸しかない、8階建てのマンションの最上階だったので、空が広く、ベランダ側からは佐世保駅を中心とする再開発地区と烏帽子岳が一望出来、もう一方の窓からは米軍基地や弓張岳方面が見えた。

烏帽子岳方向は朝日が昇り、弓張岳側には夕日が沈んだ。

日の出と日の入りの時間は、東京より一時間ぐらい遅かった。



埋立前の海面と鉄道高架橋とアルカスの鉄骨

住み始めた時は、再開発地区の港側は埋め立て工事が始まったばかりで、ベランダから見える手前の家並みの先には、まだ海面があり、その向こう側には鉄道の高架事業や、後に「アルカス SASEBO」と呼ばれるホールのある文化施設が、鉄骨の姿を現わしていた。

こうした場所で、変わりゆく街の姿を目の前にしながら暮らすことになった。

職場の市役所まではおよそ2キロの距離があり、健康維持の面から、往復歩いて通勤をした。



国道から見た佐世保市役所



佐世保川と弓張岳

行きは、佐世保川沿いを弓張岳や佐世保公園の緑を見ながら、帰りは、街の中心であるアーケード街を途中のスーパーで夕食の食材を仕入れながら、毎日、中心市街地の動きを観察することが出来た。

外食が多いと健康を害すと聞いていたので、朝食と夕食は基本的に自炊をした。

「自分だったら、自分に合う食事を出す店を探す」とアドバイスをしてくれる人もいて、当初は何軒かそれらしい店で食事してみたが、適当な店に出会わず止めた。

独り身の気楽さで、朝食は朝起きた時の気分でご飯かパンかを決め、夕食はその日の気分ですぐに食材を仕入れて料理した。



伊万里焼の郷 大川内山

九州のあちこちの街を訪れた時に、どの街にも1軒や2軒はある造り酒屋を訪ねて仕入れた日本酒を、これまたあちこちの窯元を訪れた時に、思い出として購入した「ぐい呑み」で一杯、食前酒代わりに飲みながら調理をするのが習慣になった。

もともと酒は弱く付き合い程度しか飲まないが、この一杯が、自炊をしながら一人で食事をする時のささやかな楽しみになり、今でも毎晩、ぐい呑み一杯の日本酒を欠かさない。

最初のうちは料理本を買ってきて挑戦してみたが、大体4人分の量で紹介しているので、手加減をしてもどうしても分量の調整が面倒臭く、そのうち自己流の料理になった。

佐世保生活の後半には、冬になるとほとんど鍋料理になって、野菜は同じものを何回かに分けて使うが、肉や魚や出汁などを日毎に変えて、続けて食べても飽きないように工夫した。

魚の練り物が新鮮で美味しく、また種類が多く助かった。



佐世保の朝市

マンションのすぐ裏には、市営駐車場の建物を利用した朝市が、毎日朝8時まで開かれていた。

新鮮な農産物や魚、海産物などが売られていて、ちよくちよく利用した。

スーパーで買った刺身も新鮮で美味しかったが、毎日食べると飽きてしまう。

佐世保で刺身というと、玄界灘の白身魚で身が締まっていて、赤身のマグロを食べる習慣はあまりないようだった。

意外に思ったのは寿司屋が少なく、老舗の寿司屋の広告には、マグロは築地直輸入と宣伝していた。



単身者のための料理教室

魚の捌き方教室や、単身男性向けの料理教室にも行ったが、徐々に手抜き料理になりながらも、自炊生活は最後まで続けた。



九十九島とパールシー



九十九島の夕景



九十九島の夕景を見ながらバーベキュー



ハウステンボス



ハウステンボスの夜景

緑の山と海に囲まれた佐世保の中心市街地は、地形や歴史的背景からコンパクトにまとまっていて、特に自分の住んでいたところは、利便性も良く、日常生活はほとんど徒歩で済ますことが出来た。

「アルカス佐世保」が出来てからは、大ホールで開催される音楽会を度々聴きに行ったが、余韻をそのままに歩いて帰った。

そして何と云っても、車でものの10分も走ると「九十九島パールシーリゾート」という遊覧船やヨットハーバー、水族館やレストランなどがある、九十九島観光の拠点となる施設に行くことが出来たのが素晴らしかった、

中心市街地から、「SSK バイパス」と呼ばれる新しく建設された道路を通っていくと、米軍基地や佐世保重工(SSK)のドック、赤煉瓦の建物群などの脇を通り過ぎ、暗いトンネルを抜けると、そこは緑と水の別世界というドラマチックな展開があり、西海の穏やかな美しい自然の中に身を置くことが出来た。

九十九島の美しい景色は、展海峰や石岳、弓張岳などの展望台からも楽しむことも出来た。

そして、西海の水平線に太陽が沈む時の、小さな島々がシルエットになって浮かぶ、夕焼けの海は特に美しかった。

「潮幸の宿 はな一」からは、その美しい風景を楽しみながら食事が出来、屋外のバーベキューも格別だった。

一方、大村湾に造られたハウステンボスというテーマパークは、オランダの街を真面目に模した施設づくりが特徴だが、今一つ、人気が出ず苦戦をしていた。

家族が来た時や、職場の集まりなどでも利用したり、応援の意味もあって年間パスポートというのを購入し、一人でも通ったりした。

しかし後になって、旅行代理店 HIS の社長が登場し、様々な工夫によって開業以来はじめてという人気を得て挽回し、本業の旅行業より成績がいいというようなことも聞いた。

数年前に訪れたが、特に広大なイルミネーションやプロジェクションマッピング、花火など夜のイベントが充実し、新たな魅力を加えて運営され、外国人の姿が非常に多く目立っていた。



三川内焼の郷

一方、内陸の方へ県道を数十分も走ると、三川内や波佐見、有田や伊万里など、歴史を感じさせる趣のある陶磁器の街に行くことが出来た。

窯元や販売店を巡ることが楽しかったが、「チャイナ・オン・ザ・パーク」という深川製磁の工場にある「究林登」というレストランのランチや、波佐見の近くの中尾山や鬼木の棚田など、陶磁器の他にも魅力のある場所が多く、何度も通った。



秋月の黒門

さらに長崎、西海、平戸などの長崎県内はもとより、佐賀県、福岡県、熊本県などの街や名所旧跡には、渋滞のないドライブを楽しみながら訪れることが出来た。



白杵の街並み

東京の我が家から、海や山の自然や、農村や歴史的な街に行こうとすれば、まず、渋滞する首都高速道路を一時間以上かけて抜け出さねばならず、それを考えただけでうんざりしてしまうが、佐世保では歴史や自然に触れたいと思えば、そうしたストレスなしに気楽に訪ねることが出来た。



上五島の海

「長崎は離島が多いところなので、こちらにいる間に是非行った方がいい」とアドバイスしてくれる人がいて、上五島や下五島（福江島）、壱岐、対馬などを訪れたが、市町村合併の話が出た時には宇久島も視察した。

長崎県の平戸島や生月島は橋でつながり、大島へも新たに橋が架かった。

佐賀県の鷹島、福島、熊本県の天草なども橋でつながっていて、車でそのまま行けた。

どの島も、全体が美しい自然の公園のようで素晴らしかった。



上五島の頭ヶ島教会

改めて地図を見てみると、長崎県は、リアス式の海岸線が連続していて、どこもきめ細かく入り組んだ湖のように穏やかな海の、緑に囲まれた風景が大変美しい。



黒島天主堂(佐世保市 HP)

そのあちこちに小さい教会があって、それぞれ建築作品としても魅力的な建物が多い。

中でも、重要文化財に指定されている佐世保の黒島の天主堂は煉瓦と木で造られ、規模は小さいが、中に入るとヨーロッパの古い教会にいるような雰囲気を感じさせる。

昨年、そうした教会群の多くが世界遺産になった。



夕焼けの開聞岳



レゾネイトクラブくじゅう(施設 HP)

こうしてウィークエンドには、東京の自宅に帰る以外は、レンタカーやバスツアーなどを利用して長崎県や近県の街や自然を見て回った。

また、年に3, 4回、家内が来た時は、さらに足を延ばして九州のあちこちへ遠出をした。

その中でも、大分県久住の「レゾネイトクラブくじゅう」は、のびやかな環境と施設が魅力的で幾度か訪れた。

家族で訪れたい場所の一つだが、まだ実現していない。

九州をほとんど知らなかった家内は、東京の次に土地勘のある地域になったようだ。

長期の単身赴任や単身生活というのは、一般的には珍しいことではないだろうが、自分にとっては人生60年にして初めての経験だったばかりか、その間に3人の子供達は結婚し、孫達が次々と誕生するという、家族にとっては激動の7年間だった。

息子は「単身赴任なんて絶対無理」と断言していたようだが、知り合いの中にも「単身赴任は大変だったろう」「よく7年間も頑張ったな」などと、同情か憐れみか分からぬ言葉をかけてくれる者もいる。

しかし、それまで炊事洗濯をはじめ家事や家族のことなど一切を、家内に頼っていたおかげで、仕事を中心とした自分の生活が成り立っていたことを、この単身生活で認識を新たにさせられたことは、自分にとって有意義な経験だったと思っている。

東京に戻ってから、多少なりとも家事を手伝うようになったのは、毎日しぼられるものがない生活になったということもあるが、これまでの苦勞に対する家内への感謝の念が少なからずあるからである。

佐世保ライフを無事に送ることが出来たのは、家内や家族の協力があったことはもちろん、佐世保という、知らなかった土地での生活環境が、美しい西海の自然、職場をはじめ多くの優しい人々、街づくりの現場での仕事など、優しい自然、優しい人々、優しい街という多くの面で恵まれていたからである。

生まれた時から大半の生活圏が東京と横浜中心で、故郷という土地がなかった自分にとって、佐世保の街は、「靴を間違えられた街」ではなく「懐かしい故郷」のような存在になっている。

(2019年4月 記)



弓張岳展望台から見た佐世保の街